

児島先生とお話ししたかったことなど

遠山博雄

(外国語第二部門主任)

4年前、機会あって未知なる児島弘一郎氏の幸田露伴の『五重塔』論を拝読したのが、私たちの出会いといえれば出会いです。同時にご専門の明代漢詩に関する研究論文ものぞきながら、この方は一体何歳くらいで、どんな教養を身につけてこられたのかと思ったことを、つい昨日のこのように憶い出します。アルカイズムとも言えそうな、豊かな語彙と古雅にして多彩な表現や修辞に彩られた達意の文章に不意を撃たれ、わが身の筆力の貧しさを思いつつ、ひとり唸ってしまったのです。その後縁あって同僚の児島先生となられたご当人から、今度は、映画がお好きで、蓮實重彦の映画本は全部読んだと伺って二度びっくり。中国古典文学とハスミ映画論の接点はどこにあるのか、あの言説のどんなところに興味を持たれたのか、一度ゆっくりと、お互い好きなお酒でも飲みながらお話を伺いたいと思ったものです。その願いはいつか容易に叶えられと気楽に構えていたのですが、もう見果てぬ夢になってしまったのですね。研究室が遠いとか、出講曜日がかけ違っていたとか、年齢が離れていたとか、さまざまな理由で会議の席や校務以外ではお話をする機会もほとんどなく、廊下や事務室で挨拶を交す程度の大学生活で、先生と大きな接点もなく暮らしてしまいましたが、それでもご献本いただいた教科書を抜き読みさせていただいたり、煙草を愛する漢詩やご趣味の煙草入れの蒐集についてのご講演を承ったり、私が土曜サロンという研究会で『海潮音』について話をした折に、ボードレー風風の詩を書く詩人として永井荷風が言及している明末の王彦泓の存在をご教示いただいたりと、私の中にはいくつかの忘れがたい思い出が、ささやかな酒席の記憶とともに息づいています。突然のお別れは、私にとって三度目の不意撃ちでした。ご研究はもちろんのこと、教学上の、また教職員組合の大切

な委員を務めておられた時のお仕事ぶりや、いただいた誠実なご報告やメールの日本語の見事さひとつをとってみても、将来有為の大学人の風貌を随所に感じておりましたのに、何という悲しい、早すぎる旅立ちだったのでしょうか。高輪台を隔てて海側の品川に育てられたという先生と、陸側の芝白金に生まれ育った私の間にはある種の親近感もあり、もっともとお話することもあったでしょうに、かえすがえすも残念でなりません。

今はただ先生のご冥福をお祈りするばかりです。合掌